

# Glosas Emilianenses 研究 I

Estudios sobre las Glosas Emilianenses I

太田 強正

Tsuyomasa OTA

現在Real Academia de la Historiaに所蔵されているAemilianensis60は、スペインの歴史において Trienio Liberal (自由主義の三年間) と呼ばれる時期の1821年にBurgosの知事の命により LogroñoにあるSan Millán修道院 (Monasterio de San Millán de la Cogolla) からひき出された72篇の古文書の一つである。内容は宗教的なものでラテン語で書かれているが、難しいと思われる語句には、注解 (glosas) が俗語で、つまり黎明期のスペイン語で付けられている。これが所謂Glosas Emilianensesであるが、glosasはAemilianensis60全体ではなく、その一部に付けられている。

Aemilianensis60は970~980年の作と言われ、それに付けられたglosasはスペイン語の最古の記録である。このglosasには随所にnavarroaragonesismo (ナバラ・アラゴン方言) が見られる。<sup>(注2)</sup>

この小論においては、Menéndez PidalのOrígenes del Españolの巻頭にあるテキストを用い、黎明期のスペイン語を音韻、語形、文法の面から眺めることにする。これに際して、glosasだけではなく、ラテン語の地の文章にも注目していきたい。なぜなら、ここに書かれているラテン語は中世ラテン語であるが、あまり教養のない人によって書かれたと思われ、俗語 (つまり当時の話し言葉であった黎明期のスペイン語) の反映と思われる誤りが多数見られるからである。

これらを指摘・考察するために、ここでは各文章に番号を付けた。その代り、テキストのglosasに付けられている番号は省いた。

その他、テキストにあって、歴史言語学的考察には不要と思われる記号はすべて省いた。文字 (s) も現代風に改めた。

テキストの〔 〕内が所謂glosasであるが、これは元は、ページの隅や行間に書かれたものである。訳文中の( )は筆者の判断で、訳文を補うために付けたもので、〔 〕とは無関係である。

Menéndez Pidalは、Orígenes del Españolにおいて大局的見地からglosasを解説しているが、一つ一つglosasについて詳記していないし、ラテン語の崩れについても言及していない。

そこで以下では、地の文章であるラテン語とその語句に付けられたglosasを一つ一つ検討していくことにする。

Consistorio de demonios, en que varios ministros del diablo refieren las maldades que vienen de hacer.  
<sup>(注4)</sup>

悪魔の法廷で、数名の悪魔の使者が今してきたばかりの悪さを物語る。

I-1 Quidam [qui enfot] mo nacus filius sacerdotis ydolorum...

偶像の司祭の息子であるある修道士が...

〔qui en fot〕：現代スペイン語に直訳すればquien fueである。前のQuidamを説明しており、「(monachusであった)ところの人」の意。

quienはラテン語の関係代名詞quiの単数対格quemから出ているが、音声上は半母音の〔w〕は失われた。ěはě>ę>ieの規則的变化をしている。

fotはラテン語のfuitから出た形である。

monachus：正しくはmonachusである。hはTiberius (在位AD14 - 37)の時代には発音されなくなっていた。<sup>(注5)</sup>

ydolorum：正しくはidolorum (idolumの複数対格)である。現代スペイン語におけるiとyの使い分けは、1815年出版のOrtografía 第8版でAcademiaが定めたところによる。<sup>(注6)</sup>

I-2 Et ecce repente [lueco] unus de principibus ejus ueniens adorabit eum .

すると突然に彼の高官連の一人がやって来て、彼を拝んだ。

「彼」とは誰を指すのかはっきりしないが、「悪魔」のことであろうか。

lueco：ラテン語のlŏcus (場所)の単数奮格lŏcŏから出た副詞で、現代スペイン語のluegoである。前のrepenteを説明しており、「すぐに、突然に」の意。

第一音節のŏは、ŏ>ueの規則的变化をしているが、母音間のcは有声化していない。これはRioja地方のスペイン語に見られる傾向で、cultismoである。

adorabit：正しくはadoravitであろう。adorabitはadorare (崇拜する)の未来、adoravitは完了であるが、ここでは前後関係から完了ととるべきであろう。この混同は、ラテン語のuとv (つづりの上ではuとvは自由に交代し、発音上でも両方とも単独では〔u〕、他の母音を伴う場合は〔w〕と発音されていた)が、時代が下って4世紀ごろになると、唇の丸まりが失われて〔b〕に極めて近く、正確には〔ɸ〕と発音されるようになったことに起因する。

このbとvの混同は、ラテン語の未来形消失の原因の一つである。<sup>(注9)</sup>

I-3 Cui dixit diabolus unde uenis ?

彼に悪魔が尋ねた。「お前はどこから来たのか。」

I-4 Et respondit : fui jn alia prouincia et suscitati [lebantai] bellum [pugna] et effusiones [bertiziones] sanguinum ...

すると彼は答えた。「私は他の地方にいて、戦争や流血騒ぎを起こさせました...」

jn：正しくはinである。半母音を表わすjが母音に用いられている。

suscitati：正しくはsuscitaviである。bとvの混同についてはI-2参照。

[lebantai]：前のsuscitati (suscitavi)を説明しており、「私は引き起こした」の意。現代スペイン語のlevanté (<levantar)である。

ラテン語の-are動詞の完一人称単数の語尾-aviは、-avi>-ai>éと変化してスペイン語になったが、lebantaiはその変化途上の形を残している。語中のbとvの混同についてはI-2参照。

なおlevantarは、ラテン語のlevare (軽くする、起こす)から出た動詞である。

〔pugna〕：前のbellumを説明しており、やはりラテン語で「戦闘」の意。この語はcultismoとして現代においても用いられている。

〔bertiziones〕：古典ラテン語のvertere（回す、向ける）の名詞形で中世ラテン語のvertitioから出た名詞であると思われる。現代スペイン語風のつづりに直せばverticionesとなろう。前のeffusionesを説明しており、意味はやはり「(血を) 流すこと」であろう。

bertizionesの語頭のbとvの混同については、I-2参照。第三音節の-zi-は、ラテン語の-ti-が変化したものである。ラテン語のtは口蓋母音e、iの前では擦音化し、古スペイン語においては、母音間で有声破擦音dzとなり、zとつづられていた。  
(注10)

I-5 similiter respondit:jn mare fui et suscitabi〔lebantau〕 conmotiones〔moueturas〕 et submersi〔trastorne〕 nabes cum omnibus…

彼はまた同様に答えた。「私は海にいて波をおこし、乗っている者たちもろとも船を沈めました…」

「彼」とは二番目の「高官」を指していると思われる。

jn mare fui:in mari fuiであろう。jnについてはI-4参照。

ここでは前置詞inが「～において」と静止を表わしているので対格(mare)ではなく、奮格(mari)を支配するのが正しいと思われる。前置詞の後での対格と奮格の混同についてはII-11参照。

suscitabi：I-4参照。

〔lebantau〕：bとvは混同されているが(I-2、I-4参照)、活用語尾はラテン語の完了一人称単数である。この語も前のsuscitabiを説明しており、意味はI-4の〔lebantai〕と同じである。

conmotiones：「かき立てること」の意であるが、ここでは具体的に「波」ととるのが適当であろう。

〔moueturas〕：現代スペイン語のmouedurasである。前のconmotionesを説明している。moueduraは「流産」の意で用いられることが多いが、このmoueturasは「動くこと」、具体的にはやはり「波」を意味していると思われる。

moueturasは、母音間のtがまだ有声化していないほか(I-2参照)、vがラテン語におけると同じようにuでつづられている。

〔trastorne〕：前のsubmersiを説明しており、accentoを付ければ(trastorné)現代スペイン語と同形。「私は転覆させた」の意。

nabes：正しくはnavesである。bとvの混同についてはI-2参照。

I-6 Et tertius ueniens〔elo terzero diabol〕 uenot〕…

そして三番目の(悪魔)がやって来て…

「三番目の(悪魔)」とは、I-2からI-5と続く悪魔の手下である高官連の一人であろう。なおここではrespondit(答えた)が省略されていると思われる。

〔elo terzero diabol〕 uenot〕

elo：ラテン語の指示詞illeの単数対格illumから出た男性定冠詞単数形である。現代スペイン語の冠詞は、単数形はラテン語の主格単数形から、複数形は対格複数形から来ているが、このeloは単数形であるのに対格  
(注11)

から来ている。これはnavarroaragonés(ナバラ・アラゴン方言)の特長の一つである。

terzero: ラテン語のtertiariu(m)から出た語で、現代スペイン語のtercero(三番目の)である。ラテン語のtは口蓋母音e, iの前では擦音化し(I-4参照)、古スペイン語においては、子音の後では無声破擦音tsとなり、çとつづられていた(terçero)。しかし初期には、本来有声破擦音tʃzを表わすzの文字が無声破擦音tsに対しても用いられる混乱状態があった。このterzeroもこの混乱状態を映したものである。

diabolo: ラテン語のdiabolu(m)(diabolusの単数対格)から出た語で、現代スペイン語のdiablo(悪魔)である。語尾は-um>-u>-oの変化をしているが、アクセントのかかる音節の次の音節の母音(vocal postónica)はまだ保たれている。

uenot: 現代スペイン語のvino(<venir)で、「(彼は)来た」の意。ラテン語のvēnit(vēnireの完了三人称単数)から出た形である。語幹のēはまだiに変化していない。語尾の-otは弱変化動詞からの類推である。  
elo terzero diabolo uenotでEt tertius ueniensを説明しており、「三番目の悪魔が来た」の意。

I-7 jnpugnau quemdam monacum et uix [ueiza] feci eum fornicari.

私はある修道士を攻めて、やっとのことで彼に偶像崇拜をさせました。

fornicariは「姦淫する」の他に、「偶像を崇拜する」の意味でも用いられる。ここでは後者とするのが適当であろう。

jnpugnau: 正しくはinpugnauである。(I-4参照)

monacum: 正しくはmonachumである。(I-1参照)

[ueiza]: 前のuixの説明で、uixから出た語であると思われるが、何か誤って書かれたのかも知れない。

Señales que precederán al fin del mundo.

世の終りに先立つるし。

II-1 Incipit interrogatio de nobissimo. -Rex Aristoletis Alexandro episcopo.

世の終りについて審問が始まる。-アリストテレスの王が司教アレクサンデルに。

アリストテレスの王も司教アレクサンデルも誰であるか不明。

nobissimo: 正しくはnovissimoである。bとvの混同についてはI-2参照。

II-2 Indica [amuestra] mici denobissimis temporibus...

最後の時(世の終り)について私に知らせなさい...

[amuestra]: mostrarの古形amostrarの二人称単数に対する命令形。「汝示せ」の意。amostrarもmostrarもラテン語のmōnstrareから来ているが、ōにアクセントがかかるとueと割れる。

(規則的にはo>ueである)

mici正しくはmihiである。

denobissimis: 正しくはde novissimisである。bとvの混同についてはI-2参照。

II-3 et pactus [eloleged...] non obserbabuntur...

牧場は顧みられなくなるだろう...

pactus : 中世ラテン語で「牧場」の意。

[eloleged...] : navarroaragonésの男性定冠詞単数形elo (I-6参照)にleged...が付いたものであろうが、leged...は語形、意味共に不明。

II-4 et despiciunt Dei misteria [ber...], et non se flectent [non...taran] jn oratione...

そして(人々は)神の奥義を軽蔑し、祈りの時にひざまずかない...

misteria : 正しくはmysteriaで、ギリシャ語の *μυστήριον* から来ている。yはギリシャ語のοをラテン文字で表わしたものであるが、時代が下ると[i]と発音されるようになった。(ギリシャ語からの古い借用語では[u]として受け入れられた。) Appendix Probiに、gyrus non girusとある。  
(注17) (注18)

[ber...] : 語形、意味共に不明である。

[non...taran] 語形、意味共に不明である。

jn : 正しくはinである。(I-4参照)

II-5 et abicinabunt se[aluenge seferan]jtinere et elongabitur amicitia et diuiditur cor hominis per multas diuisiones [partitjones], et pudor [uerecundia] nullus erit jn muliere...

(人々は)道においては近づくが、友情は遠のき、人の心はいくつにも別かれ、女には恥らいがなくなるだろう...

abicinabunt : 正しくはavicinabuntで、中世ラテン語avicinare (近づく)の不完了未来三人称複数形である。ここでは他動詞として用いられている。現代スペイン語のavecinarsはこの語を直接の語源としていると思われる。なおbとvの混同についてはI-2参照。

[aluenge seferan]

aluenge : 中世ラテン語のalonge (遠くから)から出た副詞で、古典ラテン語のlongeに接頭辞のaが付いた形である。  
(注19)

語中の-g-の発音であるが、gは口蓋母音(前舌母音)e、iの前では古典ラテン語においても調音点が前よりになっていたが、それがさらに後続母音e、iに引き付けられて前に移動し、4世紀ごろには口蓋摩擦音の[j]と発音されるようになった。  
(注20)

aluengeは、ラテン語のlongeがスペイン語ではlueñeとなっていることから推しても、[aluénje]の過程を経て[aluérje]と発音されていたと思われる。(longe>lueñeにはluengeという語形が間にあり、これはGlosas Silensesに見られる。)  
(注21)

なお、alōnge>alueneにおいては、ō>ueの規則的変化が見られる。

seferan : se feranで、現代スペイン語のse haránである。feranもharánもラテン語のfacereから出た形であるが、「不定詞+haber (<habere)」の新しい未来形(古典ラテン語では未来は単一形であった)の三

人称複数形である。

古スペイン語においては、ラテン語のfacereから出た不定詞はfar, ferなど種々の形があった。<sup>(注22)</sup>  
feranの語頭のfであるが、ラテン語の語頭のfは一般的に言って、f→h→φ-の過程を経てスペイン語に至っているが、現代スペイン語はhの段階をつづりに残している。

f→h-の変化は、一般にバスク語のsubstratoのためとされ、スペイン北部に始まり、序々に南へ浸透して行った。f→h-の文字による記録は9世紀にさかのぼることができる。<sup>(注24)</sup><sup>(注25)</sup>  
aluenge seferanで前のabicinabunt seを説明していると思われ、「遠くから来る・集まる」の意か。seferan (se harán)の意味が定かではない。

jtinere : 正しくはitinereである。(I-4参照)

[partitjones] : 正しくはpartitionesである。(I-4参照) 前のdiuisionesを説明しているラテン語で、やはり「分割」の意。

[uerecundia] : 前のpudorを説明しているラテン語で、やはり「恥」の意。スペイン語のvergüenzaはこの語から出ている。

jn : 正しくはinである。(I-4参照)

## II-6 et multiplicabitur beneficia [elos serbicios ; abientia] ...

そして教会の財産が増大するだろう...

multiplicabitur:beneficiaが主語なので、multiplicabunturとすべきであろう。

[elos serbicios ; abientia]

elos ; ラテン語の指示詞illeの複数対格illosから出た男性定冠詞複数形。(I-6参照) 現代スペイン語の男性定冠詞複数形losはこのillosのaféresisである。

serbicios : 現代スペイン語のserviciosである。bとvの混同についてはI-2参照。

この語はラテン語のservitiumを語源としているが、ラテン語のtは口蓋母音e, iの前では擦音化し(I-4参照)、古スペイン語においては、母音間では有声破擦音dzとなり、zとつづられていた。しかしここではdz<sup>(注26)</sup>に対してcが当てられている。

elos serbiciosは前のbeneficiaを説明しており、やはり「教会財産」の意であろう。beneficiumとはもともと聖職者がもらう俸給のことである。

abientia : ラテン語のhabentia (財産) をスペイン語的にしたものであろう。やはり前のbeneficiaを説明している。

hについてはI-1参照。

第2音節のěはě>ieの規則通りの変化をしているが、最終音節の-tiaはラテン語の形がそのまま用いられている。もしスペイン語的变化をしたとすれば、-ça (\* abiença) となったと想像される。現代スペイン語にはabientiaから出た語はない。<sup>(注26)</sup>

## II-7 et abitationes antiquas desolabuntur [nafregarsan] ...

古い住居は見捨てられるだろう...

abitationes : 正しくはhabitationesである。hについてはI-1参照。

[nafregarsan] : nafregarse hanである。ラテン語の単一形未来にとって替わるスペイン語の複合形未来「不定詞+haber」に再起代名詞seが付いた形である。

nafregarは、Joan CorominasのDiccionario Crítico Etimológico de la Lengua Castellanaではラテン語のnafragare (難船する)との関連が指摘され、echar a perder, inutilizarと説明されている。(nafrarの項目)

nafregarsanは現代スペイン語に直訳すれば、se naufragaránであるが、この語が前のdesolabunturを説明しているところから見ても、「見捨てられる」に近い意味で用いられていると思われる。

II-8 et non est cui credatur, oratoria dextruuntur [nafregatos] ...

そして信じられる人がいなくなり、礼拝堂が破壊される...

dextruuntur:destruuntur (<destruere-破壊する)の誤りであろう。

nafregatos : II-7のnafregarの過去分詞男性複数形である。母音間のtがまだ有聲化していない。この語は前の動詞dextruuntur (destruuntur)を説明しているが、「破壊された」の意であろう。

II-9 et effunditur [uerteran] sanguinem justorum...

そして義人たちの血が流される...

[uerteran] : 現代スペイン語のverterán (verterの未来三人称複数)である。前のeffunditurを説明しており、「流れるだろう」の意。

sanguinem : 主語なので、主格sanguisを用いるべきである。sanguinemはsanguisの単数対格である。主格と対格は古典期以前から感嘆文などでは混用されて来た。ここでは受動態の動詞の主語が対格になっているが、同じ例がPeregrinatio Aetherae 25,3に見られる。

Primum aguntur gratiae Deo, et sic fit orationem pro omnibus ; (まず神に感謝が捧げられ、そして次の様に皆のために祈りが捧げられた)

ラテン語の対格は、ロマンス語化する過程で他のすべての格を吸収していくが、このsanguinemもこの変化と無関係ではあるまい。スペイン語のsangreも対格sanguinemから出ている。

II-10 et fides nulla erit;et maledicent principes suos; et abicinabunt se [alongarsan] jtinere...

そして信仰がなくなるだろう。そして(人々は)自分たちの君主の悪口を言い、道において近づくであろう...

後述するが矛盾した文章である。

abicinabunt : II-5参照。

[alongarsan] : alongarse hanである。(II-7参照) 現代スペイン語ではse alongaránである。前のabicinabunt seを説明していると思われるが、「(彼らは)遠ざかるであろう」を意味し、正反対である。前後関係からして、恐らくこのglosaの方が正しいであろう。

jtinere : II - 5参照。

II - 11 et minuabit terra et multum ab traque partes [ambas partes] ...

地が縮まり、両側から多くが...

minuabit: minuareは中世ラテン語で、minuere (縮少する)の意である。

ab traque partes : 正しくはab ultrisque partibusとすべきであろう。(traqueはultraqueであろう)

ここでは奮格支配の前置詞abの後に対格partesが用いられている。前置詞の後での対格と奮格の混同は、ラテン語の格体系崩壊の原因の一つであるが、俗ラテン語においてはこのケースのように、前置詞の後では対格のみが用いられるようになる。

(注29)  
[ambas partes] : 現代スペイン語と形も意味も同じである。前のtraque partesを説明しており、「両方の部分(両側)」の意。

II - 12 sicut [quomodo] stella matutina...

明けの明星のように...

[quomodo] : ラテン語である。前のsicutを説明しており、やはり「~のように」の意。現代スペイン語のcómo(疑問副詞)、como(接続詞)はこの語から来ている。

II - 13 et facit jn frontem characterem [seingnale] ...

そして額に印を付ける...

この文章は主語不明である。

jn : I - 4参照。

[seingnale] : 中世ラテン語のsignale(しるし)から出た語で、現代スペイン語のseñalである。ラテン語の-gn-は一般にスペイン語の-ñ-(j)に変化して行くが、この音は古くは,ni, niの逆になったin, ng, gn, nn等で表わされていたが、seingnaleはこのうちのinとgnがダブって用いられたものであろう。現代スペイン語のñは、Castilla地方で用いられていたnnの略字ñから来ている。

(注30)  
なおseingnaleは語末の母音eを保っている。

II - 14 et ab aquilone usque jn meri die [merita] ...

そして北から南まで...

jn meri die : 正しくはin meridiemとすべきであろう。jnについてはI - 4参照。

前置詞inは対格と奮格を支配するが、ここではusque in meridiem(南まで)と運動を表している所以对格を用いるべきであろう。jn meri die(in meridie)は前置詞の後での対格と奮格の混同であるが、II - 11(ab traque partes)とは反対のケースである。この様な例も数多くある。



[merita] : 意味不明である。

II - 15 【Cristo bajará contra el Antecristo : 】 et in terra quam jlle maledictus aqua siccauerit, dauit Dominus jn terra aquam suam ;

【キリストがキリストの敵に対して天から降りて来るであろう】、そしてその呪われた者(キリストの敵)が水を涸らした地において主はおのれの水を与えるであろう。

jlle : 正しくはilleである。(I - 4参照)

dauit : 正しくはdabitである。u ( v ) と b の混同については I - 2参照。

jn terra : 「地に」と運動を表わしているの、 in terramと対格を用いるべきであろう。(II - 14参照) jnについては I - 4参照。

II - 16 et ubi quod non fuit aqua, cursiles [correnteros] dauit aquas.

そして水のなかった所に、(主は) 急いで水を与えるであろう。

cursiles : 語形、意味共に不明であるが、この語を説明している [correnteros] から推して、「急いで」の意であろうか。ラテン語のcurrere (走る) を語源としていると思われる。

[correnteros] : 中世スペイン語の形容詞で、「急いでいる」の意。この語もcorrer (<currere) が語源であろう。前のcursilesを説明しており、形容詞の副詞的用法であろうか複数形になっているが、主語は動詞dauitから見て単数である。

dauit : II - 15参照。

II - 17 Et jnueniebit [aflarat] jllum maledictum juxta mare et occidit eum Dominus gladio ori sui.

そして主はその呪われた者を海辺で見つけ、剣で彼を殺す。

jnueniebit : 正しくはinuenietであろう。第一変化動詞 (-are) の未来三人称単数の活用語尾-bitと第四変化動詞 (-ire) の同活用語尾-etを混合した形であると思われる。

語頭の j については I - 4参照。

[aflarat] : この語は古典ラテン語のafflareから来ているが、意味の上では興味深い変化をしている。afflareはもともと「息を吹きかける」の意であるが、それが狩りの際、犬が獲物を「嗅いでまわる」と変化し、さらにここから「見つける」となった。このafflareから現代スペイン語のhallarが出ている。<sup>(注31)</sup>

jllum : 正しくはillumである。(I - 4参照)

[注]

1 Ministerio de Educación y Ciencia, Las Glosas Emilianenses, p.13

2 ibid., p.25

〔注〕

- 1 Ministerio de Educacion y Ciencia, Las Glocas Emilianenses, p.13
  - 2 ibid. p.25
  - 3 ibid., p.15
  - 4 この後に、( Es variante del cuento de las Vitae Patrum, V, 5<sup>o</sup>, 39, edic. Rosweydi, Lion, 1617, pág. 441a. ) と記されているが、筆者はこの Vitae Patrum を見つけることができなかった。
  - 5 Lapesa, Rafael, Historia de la Lengua Española, p.422
  - 6 ibid., p.423
  - 7 Menéndez Pidal, Ramón, Orígenes del Español, p.250, p.520
  - 8 Lausberg, Heinrich, Lingüística Románica I, p.356
  - 9 ibid., II, p.310
  - 10 Macpherson, I.R., Spanish Phonology, p.126
  - 11 Menéndez Pidal, Ramón, Manual de Gramática Histórica Española, p.259
  - 12 idem, Orígenes del Español, p.332
  - 13 Macpherson, I.R., op.cit., p.126
  - 14 Menéndez Pidal, Ramon, Orígenes del Español, p.63
  - 15 idem, Manual de gramática Histórica Española, p.314
  - 16 idem, Orígenes del Español, p.370
  - 17 Väänänen, Veikko, Introducción al Latin Vulgar, p.73
  - 18 Probusなる人物によって、3~4世紀ごろ書かれたと言われる一種の「正誤一覧表」C.Diaz y Diaz, Manuel, Antología del Latín Vulgarによる。
  - 19 Du Cange, Glossarium Mediae et Infimae Latinitatis I
  - 20 Macpherson, I.R., op.cit., p.104
  - 21 拙稿「Glosas Silenses研究Ⅱ」, 神奈川大学「人文研究」(第93集), p.29
- Glosas Silensesは、Glosas Emilianensesよりやや遅れて書かれ、両者は古スペイン語研究の上でその類似性・重要性において対をなすものである。
- 22 Menéndez Pidal, Ramón, Manual de Gramática Histórica Española, p.277
  - 23 諸説あり。( Orígenes del Español, p.198~208)
  - 24 Menéndez Pidal, Ramón, Manual de Gramática Historica Española, p.123
- Lausberg, Heinrich, Lingüística I p.311
- 25 Menéndez Pidal, Ramón, Orígenes del Español, p.212
  - 26 Macpherson, I.R., op.cit., p.126
  - 27 Menéndez Pidal, Ramón, Orígenes del Español, P.380
  - 28 Väänänen, Veikko, op. cit., p.186~188
  - 29 Menéndez Pidal, Raman, Manual de Gramática Histórica Española, p.206
  - 30 Idem, Orígenes del Español, p.49~52
  - 31 Lüdtke, Helmut, Historia del Léxico Románico, p.103

#### 参考文献

- Menéndez Pidal, Ramón, Orígenes del Español, Espasa-Calpe, Madrid, 1976  
Idem, Manual de Gramática Histórica Española, Espasa-Calpe, Madrid, 1973  
Ministerio de Educación y Ciencia, Las Glosas Emilianenses, Madrid, 1977  
Lapesa, Rafael, Historia de la Lengua Española, Gredos, Madrid, 1980  
Macpherson, I.R., Spanish Phonology, Manchester University Press  
Väänänen, Veikko, Introducción al Latin Vulgar, Gredos, Madrid, 1975  
Larsberg, Heinrich, Lingüística Románica I, Gredos, Madrid, 1972  
Idem, Lingüística II, Gredos, Madrid, 1973  
拙稿「Glosas Silenses 研究Ⅱ」神奈川大学「人文研究」(第93集)1985・12  
C. Díaz y Díaz, Manuel, Antología del Latín Vulgar, Gredos, Madrid, 1974  
Lüdtke, Helmut, Historia del Léxico Románico, Gredos, Madrid, 1974

#### 辞書

- Du Cange, Glossarium Mediae et Infimae Latinitatis, Forni, Bologna, 1981  
Corominas, Joan, Dicciónario Crítico Etimológico de la Lengua Castellana, Gredos, Madrid, 1974  
Diccionario Ilustrado Latino-Español Español-Latino, Bibliograf, Barcelona, 1974  
Alonso, Martin, Dicciónario Medieval Español, Universidad Pontificia de Salamanca, 1986  
Corripio, Fernando, Dicciónario Etimológico General de la Lengua Castellana, Bruguera, Barcelona, 1973  
  
田中秀中, Lexicon Latino-Japonicum (羅和辞典), 研究社, 東京, 1981  
Oxford Latin Dictionary, Oxford University Press, New York, 1984  
Real Academia Española, Dicciónario de la Lengua Española, Espasa-Calpe, Madrid, 1984  
Pabón, J.M., Dicciónario Manual Griego-Español, Bibliograf, Barcelona, 1975